

## スペイン内戦（1936～39 年）

スペイン内戦を考える場合、まずそれにいたる 3 つの事件を挙げておきたい。

- ① 1898 年 2 月、米西戦争勃発。スペインが完全に負けたために、キューバの独立、フィリピン、グアム、プエルト・リーコをアメリカに割譲。スペインに残る植民地は、大航海時代に獲得したラテン・アメリカ（ヒスパノ・アメリカ）には皆無となり、北アフリカのモロッコのみ。この年の 6 月 5 日、フェデリコ・ガリシア・ロルカが生まれる。
- ② 1931 年 4 月、統一地方選挙の結果、反王政・共和派諸政党が勝利し、スペインの主要都市で共和制宣言が行われ、アルフォンソ 13 世が亡命し、スペイン第二共和国の誕生。
- ③ 1936 年 2 月、総選挙で、人民戦線派（左翼諸政党）が国民戦線派（右翼諸政党）に勝利し、人民戦線内閣の誕生。

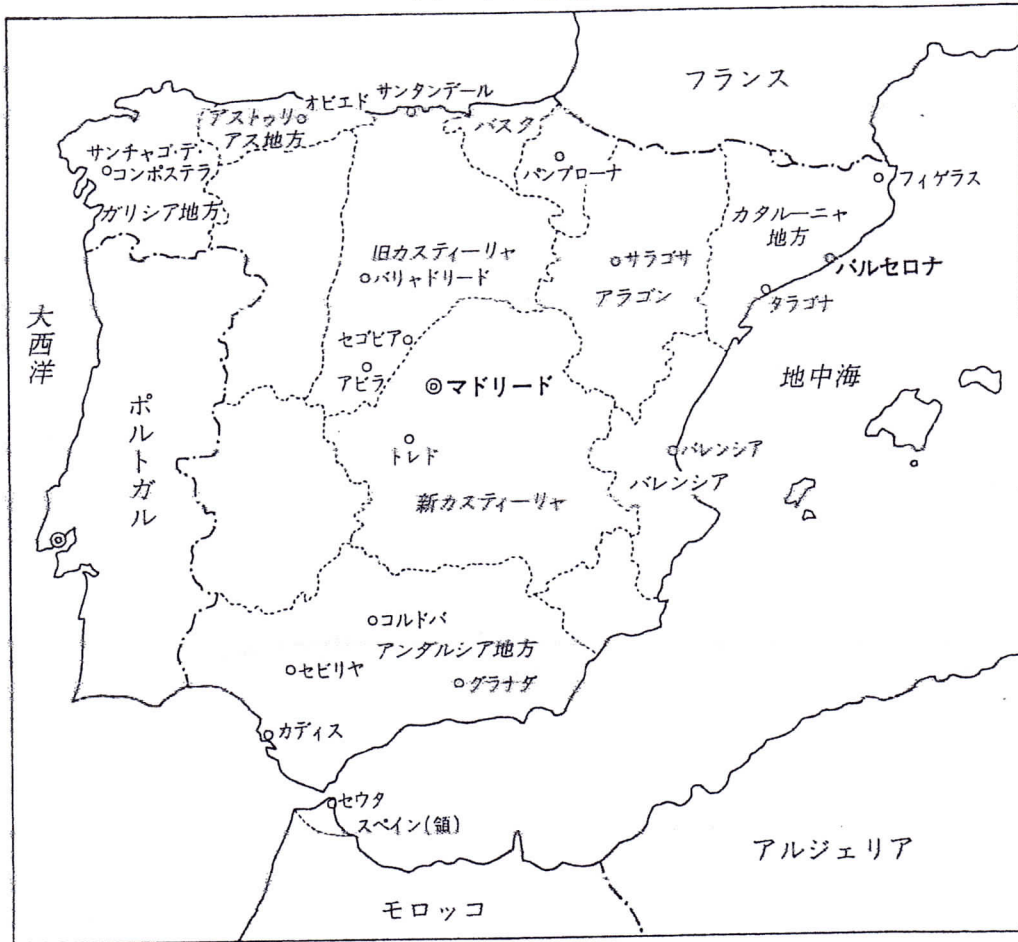
\*       \*       \*

- 1. スペイン内戦は、現在でも「市民戦争」「内乱」「革命」「戦争」「内戦」と呼ばれている。
- 2. ほぼ全国的規模での軍部のクーデターと民衆の武力抵抗（1936 年 7 月 17～19 日、マドリード、バルセロナ、バレンシアにおけるクーデターの失敗と鎮圧）。スペイン内戦の「原風景」。
- 3. 地方自治政府の誕生、カタルーニャ自治政府（1936 年 2 月）、バスク共和国（1936 年 10 月）。
- 4. 社会主義国の同盟国への援助と支配権の確立。具体的には、スペイン共和国に対するソ連のスターリン外交政策。
- 5. 呉越同舟の人民戦線の結成（1936 年 2 月）と破綻。バルセロナの市街戦（政府＝共産党 VS 反共産党勢力。1937 年 5 月 3～8 日）、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』（岩波文庫・早川文庫・・・）。
- 6. 個人的な倫理観や世界観に基づく政治参加。世界的に著名な芸術家の参加。アンドレ・マルロー、サン＝テグジュペリ、シモーヌ・ヴェイユ、ヘミングウェイ、ドス・パソス、ティーブン・スペンダー、オクタビオ・パス、ピカソ、ジュアン・ミロ。
- 7. 55 カ国から約 4 万人の義勇兵の共和国軍の戦列に参戦、「国際旅団」の結成（1936 年 10 月）。唯一の日本人義勇兵ジャック白井は、アメリカ人大隊（リンカン大隊）の炊事兵兼兵站部兵卒としてマドリード防衛戦に

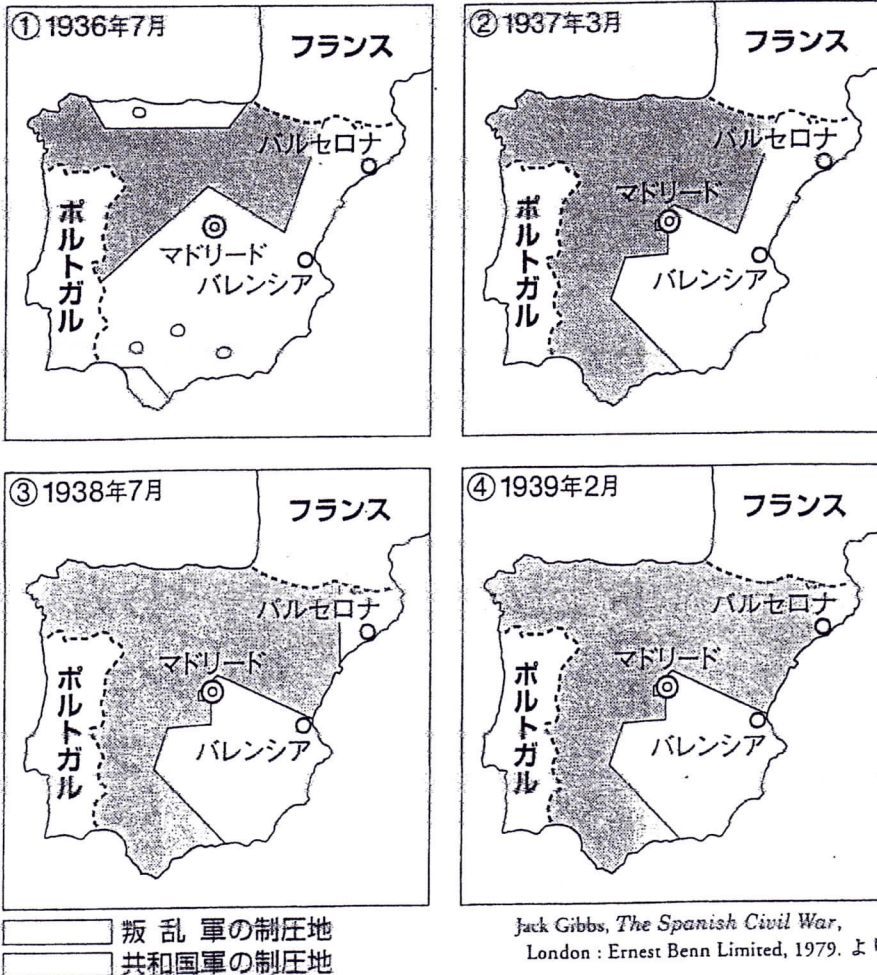
- 従軍中に、戦死する（1937年7月11日）。
8. ヨーロッパの民主主義陣営エゴイズムによる、フランスの提案、イギリスを始め27カ国が参加した「スペイン不干渉委員会」の設置（1936年9月）。ドイツ・イタリア、そしてソ連も参加。不参加はスイス、そして当事国のスペイン共和国。それ故に、スペイン共和国は、交戦国の権利としての兵器類を外国から購入が出来なくなり、結果からすれば、スペイン共和国の「見殺し」に加担したことになる。
  9. 列強の代理戦争的側面。ドイツ・イタリアのフランコ叛乱軍支持と軍事援助。ソ連のスペイン共和国援助。
  10. 共和国陣営における政治的粛清、共産党派と反共産党派との内戦をめぐる路線上の対立・確執・闘争。パルセロナ市街戦の裁判と結審、そして処刑（1938年11月1日）。イギリスのケン・ローチ監督の映画『自由と大地』（1995年）。
  11. 戦争プロパガンダの政治優先主義。両陣営とも外国人の新聞記者やジャーナリストへの記事の検閲、身柄の拘束。
  12. 政治権力や政府の存在すら容認していないアナキストの共和国政府への入閣。
  13. 非戦闘員の殺戮（詩人・劇作家のガルシア・ロルカが生まれ故郷のグラナダ郊外で虐殺、1936年8月20日）、フランコ叛乱軍傘下のドイツ・コンドル飛行軍団による無差別絨毯爆撃、バスクの聖都ゲルニカ爆撃（1937年4月）とピカソの壁画『ゲルニカ』。
  14. 内戦終結（1939年4月1日）後、勝利者フランコ総統下のスペインに残された元共和派は過酷な弾圧にさらされる。スペインを「中世」にもどしてしまったといわれた。たとえば、イギリスの作家ドナルド・フレザー『壁に隠れて——理髪師マヌエルとスペイン内乱』（平凡社、2001年）、30年間も壁に隠れていた男の話。また、1978年2月のイギリスの保守系の新聞『サンデー・タイムス』は、付録雑誌の特集「スペインのモグラ」を紹介している。実に39年間も、アンダルシアで潜伏生活を余儀なくされたのであった。また、軍事独裁者フランコの敵である共和派をいかに「浄化」してきたか、フランコ体制はのための「記憶と歴史の消滅」の時期だったとするマイケル・リチャーズの『沈黙の時間』（Michael Richard, A Time of Silence, Cambridge U.P.1998）。



# スペイン全図



## 内戦期のスペイン



Jack Gibbs, *The Spanish Civil War*,  
London : Ernest Benn Limited, 1979. より

# DEATH OF A SPANISH POET

## EYE-WITNESS TELLS OF MURDER OF GARCIA LORCA

"That day I was on guard. I stepped aside to let pass a very young looking man being led by the Civil Guards. He was pale, but walked serenely."

The Spanish lad recounted his story, at first reluctantly, and then in a fluent, straightforward manner. A few months



GARCIA LORCA

beloved Spanish folk-poet, murdered at Granada by the fascists.

ago he escaped from fascist territory and came to our lines on the Granada front. He told how Federico Garcia Lorca, the famous Spanish poet, met his death during the first months of the war, at the hands of the fascists.

"When I saw him", he continued solemnly, "I understood the tragedy that encircled him. Over his head hung the pall of death for having written his famous romance of the 'Civil Guards'."

"Did you know Garcia Lorca?" he was asked.

"No; I had read him a great deal, however. I knew his works and his life. I also know of his death—the manner in which his life was ended I shall never forget. It was so monstrous, so criminal, that I can never rub it out of my memory."

The lad unfolded his story: "Garcia Lorca was located in

## JACK SHIRAI

(Japanese-American Volunteer, killed at Villanueva de la Cañada.—July, 1937)

I hear that Comrade Shirai fell,  
Who did not know him?  
His funny pidgin English,  
His smiling eyes,  
And his brave heart  
Made him loved as a brother  
In the Abraham Lincoln Battalion,  
Jack Shirai of Hakodate,  
Son of Japanese earth.  
He went to America  
Because at home there was no bread;  
Became a cook in Frisco.  
His art tickled the palates  
Of the richest playboys of the city.  
In the summer of nineteen hundred thirty-six,  
As the newspaper wrote,  
In Europe, in Spain,  
The Fascist wolf had come out to murder.  
Jack Shirai packed his few things  
And was among the first  
To come from America  
Helping the Spanish people in their fight  
For human rights.  
When the bullets whistled  
And the tearing shells burst,  
Then the boys of the Lincoln Battalion  
Watched Jack Shirai.  
He had a laughing heart!  
Once (in June on the Jarama)  
He was sent as a cook  
Behind the lines to a hospital.  
They liked him there—the sick,  
The wounded, everybody.  
And the village farmers talked often  
Of the Japanese who had come so far for them.  
But one day he ran away,  
Back to the lines—to the front.  
In the North, when we cracked  
The ring around Madrid,  
He was there as we stormed Brunete,  
And Villanueva de la Cañada.  
As the night was bright  
With the shine of the burning towns,  
Torn by exploding bombs  
And the voices of the great guns,  
Jack Shirai fell.  
The Abraham Lincoln Battalion  
Of the People's Army of Freedom,  
And the Japanese proletariat,  
Will not forget him."

LUDWIG D.



JACK SHIRAI:  
"He had a laughing heart."

the night. The Civils placed themselves behind the head lights, from where they could not be seen.

"Garcia Lorca walked firmly with magnificent calm. Suddenly in the middle of the road, he halted. He turned swiftly and faced us, causing the insolent Lieutenant Medina, who was commanding the Civils, to gape in astonishment.

### LORCA SPEAKS

"Garcia Lorca spoke. He did not speak feebly, nor did he plead for his life. His powerful words were in defense of the thing he always loved: Liberty. He eulogized the cause of the people, and condemned the barbarity of fascism.

"Those fiery words, produced a tremendous disturbance among the Civil Guards. For me it was like a penetrating light in my brain. The poet continued talking... but his words were cut short. Lt. Medina exploded with blasphemous words and fired his pistol at the poet. Then he set the Civil Guards against him.

### CLUBBED WITH RIFLES

"The spectacle was terrible. They threw themselves upon him and struck him mercilessly with the butts of their rifles. Some of us remained stationary, too horrified to do anything. Garcia Lorca ran and was followed by a rain of bullets. A hundred yards away he keeled over. As the murderers approached him with intentions of finishing him, he raised his body, streaming

(Continued on page 5.)

a French legation, so I was told. By means of trickery he was induced to come out. When he did so, he was seized. He was not tried by any kind of tribunal. (For that matter, neither was anybody else held by the fascists.) The night of that very same day he was pulled out of the jail where the Civil Guard had him incarcerated. Among a squad of guards he was shoved into an automobile. I am sorry to say

that I figured among this blood-thirsty group.

"The line of autos, like a sinister convoy, pulled out onto the Padul road. We were driven 18 kilometers from Granada. It was 8 o'clock at night when we finally got out of the autos. The automobile headlights were focused directly on the man who was marching to his death. The silhouette of Garcia Lorca cut an omnipresent figure in the darkness of



『自由のための義勇兵』(1937年8月9日号)

「ジャック白井——日系アメリカ人義勇兵、1937年7月、ピリヤヌエバ・デ・ラ・カニャーダにて戦死」(D・ルドウィック)

同志白井が斃れた。

彼を知らない者がいただろうか

あのおかしなべらんめい英語

あの微笑の瞳

あの勇敢な心

エイブラハム・リンカン大隊の戦友は

彼を兄弟のように愛していた。

函館生まれのジャック白井

日本の大地の息子

故郷で食うことができず

アメリカに渡り

サンフランシスコでコックとなった。

彼の腕は町の最も食通の連中の

舌を満足させた。

一九三六年の夏

新聞が書きたてた

ヨーロッパで、スペインで、

ファシストの狼が殺人者になったと。

ジャック白井はささやかな荷物をまとめた

人間の権利を守るために

戦っているスペイン人民を助けようと

アメリカから馳せ参じた

最初のグループの一人だった。

弾丸がうなりをたてて飛び交い

猛烈な砲弾が炸裂するとき

リンカン大隊の青年たちは

ジャック白井を見つめた。

かつて(二月のハラマ戦線)

彼は後方の野戦病院へ

炊事兵として派遣された。

病院の誰からも愛された。

傷病兵たちからも。

村の農民たちも、遠い所からやって来た

この日本人のことを話題にした。

だが、ある日、彼は戦線へ

最前線へ逃げ戻って来た。

味方が、マドリード包囲軍を

北方から突破した。

味方が、ブルネテとピリヤヌエバ・デ・ラ・カニャーダを急襲したとき

彼もその最前線で戦っていた。

燃えさかる町々の焰の舌が夜空を照らし

炸裂する爆弾と砲弾の轟音が

耳をつんざいたとき

ジャック白井は斃れた。

自由を求める人民軍である

エイブラハム・リンカン大隊は

さらに日本の労働者階級は、

彼のことを決して忘れないであろう。

April, 1937  
 Jarama front  
 Killed in action on  
 Brunete front  
 July, 1937  
 Comrades  
 Jack Stinson &  
 James Ford

写真の裏面。「1937年4月、ハラ  
 マ前線。同志ジャック白井とJ・  
 フォード」などと書かれている。



前線を訪れた黒人労働運動の指導者J・W・フォードと握手をするジャック白井



スペイン戦争で戦ったジャック白井（前列右）。その  
 となりがオリバー・ロー大隊長（ブルネテ戦線で）

ブルネテの戦闘（1937年7月6～24日）

ジャック白井の戦死（1937年7月11日）



スペイン内戦と昭和の「転回点」ノモンハン事件（1939・5・11～9・15）

- 1931年9月18日、 満洲事変の勃発。関東軍の板垣征四郎・石原莞爾ら、満洲の武力占領計画を実行するために、奉天郊外柳条湖の満鉄線路の爆破、関東軍司令官本庄繁、これを中国側の行為とし、総攻撃を指令。
- 1932年3月1日、 満洲国の建国を宣言。  
9月15日、 日満議定書に調印。  
10月1日、 満洲問題に関する国際連盟のリットン調査団の報告書。
- 1933年2月14日、 国際連盟19人委員会、リットン報告書の採択、満洲国の不承認に関して全員一致する。  
2月24日、 国際連盟総会、19人委員会の報告書を賛成42、反対1（日本）、松岡洋右代表、国際連盟脱退を正式表明。
- 1934年3月1日、 関東軍、溥儀を満洲帝国皇帝に就任させ、帝政を開始する。年号は康德。

これ以降、日本の勢力が北満一帯に拡大して日ソ両軍の国境紛争事件が頻発した。たとえば、満ソ国境とハルハ河沿いを隔てて対峙し、飛行機の越境不時着、国境警備隊の衝突といった国境紛争事件が、1933年から34年にかけて約150件、35年だけで174件も起こった。1936年3月16日に設置された満ソ東部国境画定のための「混合委員会」も、同年11月25日に成立した「日独防共協定」のためにソ連側から中断されてしまい、いわば日ソ間の一触即発的状況が続いていた。従って、日本政府時は対ソ政略を凍結し、対ソ戦略に移行せざるを得なかった。

- 1936年10月下旬、 フランス大使館付き駐在武官西浦進大尉、参謀本部の命を受けて、リスボン経由で密かにフランコ軍の仮首都サラマンカに赴く。日本はフランコ軍を正式に承認していなかったために、西浦大尉は半ば監禁

状態におかれる。やがてフランコ軍当局は「日独防共協定」の締結を知り、サラマンカ駐在ドイツ大使ファルベル將軍の仲介でようやく西浦大尉に宣戦通貨証明書を交付し、フランス語通訳将校と自動車1台、提供された。したがって彼は、日本の武官として初めてフランコ軍を観戦したのである。「観戦武官」として彼の任務は、「マドリード戦線、独、伊の飛行部隊、政府軍の反日、蘇軍の兵器」の調査であった。ソ連軍の兵員や兵器、軍事作戦に関しては、彼の参謀次長宛の極秘電報（1937年1月6日付け）からすると、それほど具体的ではなく隔靴搔痒の感は否めない。これは、情報収集者の公的な資格、つまり「観戦武官」に起因するわけで、参謀本部としては、完璧な情報収集のために、「観戦武官」から、「作戦武官」に進展を考えねばならなかった。こうした思惑は、軍当局や駐在武官たちだけが抱いていたのではなく、矢野スペイン公使の有田外相あての電報（11月18日付け）、武者小路ドイツ大使の外相あての電報（11月12日付け）にも、如実に述べられている。

#### 《1937年》

3月29日 共和国政府、臨時駐日スペイン公使を任命。（前年の8月26日、駐日スペイン公使が反乱軍（当時の新聞では《革命軍》）にくみすると宣言）。

4月28日、前駐日スペイン公使、公使館の明け渡しを拒否、臨時公使館の開設。

11月30日、日本政府の閣議でフランコ政権を正式政府として承認の決定。

12月1日、枢密院定例参集で、大将の説明後、日本政府、スペイン共和国政府と国交断絶、フランコ政権の正式承認を宣言。

12月2日、フランコ政権と満洲國の相互承認。

12月3日、ドイツ、イタリアの満洲国承認。

#### 《1938年》

3月～ フランコ軍地中海作戦の開始。これにドイツ軍の「電撃作戦」が発動された。バレンシアとバルセロナを結ぶ地中海岸ベルト地帯を南北に分断を図る作戦に、スペイン公使館付駐在陸軍武官守屋精爾中佐は、「作戦武官」として従軍する。彼の作戦は「オペラチオン・モリヤ」という用語が生まれ、フランコ陣営の日刊紙にも大きな記事として載るほどの貢献をした。高岡公使の広田外相宛の部外極秘電報（5月17日付け）には、「守屋中佐ハ『フランコ』將軍ニ対シ我軍ノ参考ニ資ススヘキ蘇連捕獲武器（特ニ戦車ヲ希望シ其ノ製造費10萬圓程度ノモノの由）ノ譲与ヲ願出タツ趣ナルカ代償支払ノ意向ナシ言フ」とあるように、守屋中佐は好待遇を受けていた。しかも日本の参謀本部にとって、ドイツ具の最新鋭の「電撃戦」を実施検分もできた。

《1939年》4月1日、フランコ、マドリードで、内戦勝利を宣言する。



《1939年》4月1日、フランコ、マドリードで、内戦勝利を宣言する。

\*\*\*\*\*

5月12日、満蒙国境ノモンハンで、満・外蒙両軍隊の衝突。ノモンハン事件の勃発。

7月1日、日本軍、ノモンハン攻撃開始。

7月3日、敗退。

7月23日、攻撃再開。

7月24日、再度失敗。

8月20日、ソ連・外蒙古軍、総攻撃開始。日本軍第23師団の壊滅的損害。

8月23日、モスクワで、独ソ不可侵条約の締結。

8月25日、駐独大使大島浩、ドイツの独対ソ不可侵条約締結は、「日独防共協定」違反とドイツ政府に嚴重抗議。

8月28日、平沼内閣、欧州情勢は複雑怪奇」と声明を発表、総辞職。

9月1日、ドイツ軍、ポーランド侵攻、第2次世界大戦の勃発。

9月3日、イギリス、フランス、ドイツに宣戦布告。

9月3日、大本營、関東軍にノモンハン作戦中止を命令。

9月9日、東郷重徳駐ソ大使、ソ連にモンハン事件停戦と通商条約締結を提案。

9月15日、モスクワで、東郷重徳駐ソ大使とモロトフ外相の間でノモンハン事件停戦協定成立。

9月17日、ソ連軍、ポーランド侵攻。

日本側の対ノモンハン事件の対応。

「牛刀作戦」「牛刀割鶏」⇒「鶏ヲ割クニイズクンゾ牛刀ヲ用インヤ」『論語』

大島浩。(大島健一陸軍中將・陸相の長男)

陸士18、陸大27。

陸軍駐独武官(9・3)、少將(9・3)、中將(13年6月)予備役・駐独大使(同年10月)、駐独大使辞職(14年12月)、再任(15年12月)、A級戦犯。

小松原道太郎。

陸士18、陸大27。

ハルピン特務機関長(7・4)、少將(9・8)、中將(12・11)、第23師団長(13・7)、関東軍付(14・11)、予備(15・1)